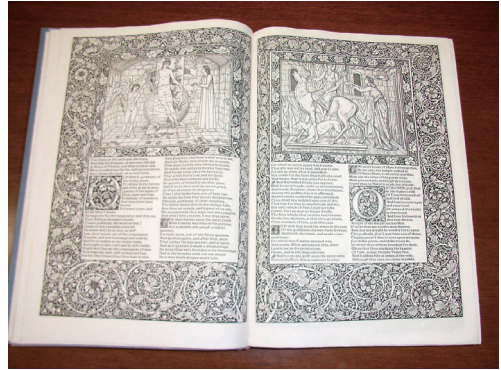


図書館だより

目次

IT と図書館	—島崎 恒藏	1
日本女子大学叢書の紹介		
島田法子・中寫邦・杉森長子共著		
『上代タノー女子高等教育・平和運動のパイオニア』		
	—島田 法子	2
新見肇子著		
『シャーロット・スミスの詩の世界—ミューズへの不満』		
	—新見 肇子	3
ベルリン図書館事情 —ドイツ最大級の学術図書館：		
ベルリン国立図書館—	—印牧 沙織	4
私と大学図書館	—横田 慧美	5
大学図書館ノススメ	—清水 香織	5
図書館を使いこなそう！—新 OPAC もご紹介—		
	—中澤 恵子	6
2010年度「学生が読みたい本」を実施して	—	8



ケルムスコット・プレス版『チョーサー作品集』

IT と図書館

島崎 恒藏

昨年あたりから電子書籍の話題を耳にすることが多くなってきた。電子書籍の出現は、ITの進展から当然予測されてきたこととはいえ、長年、慣れ親しんできた紙媒体の書籍からの移行を意味するわけで、ある種の抵抗感を伴うことは否めない。しかしそれを払拭させるかのように、電機・通信メーカーから、電子書籍等に対応した情報端末が競うように投入されている。

このようなITや電子書籍の動向は、これからの図書館にどのような影響を与えるのであろうか。わが国の図書館の中でも、中核的な存在である国立国会図書館では、電子部門を拡充し、図書デジタル化を推進するとともに、図書館界の電子化を主導しようとしている。他方、印刷・出版業界などでは図書館向けに電子化した本をインターネット経由で貸し出せるようなサービスを始めたところもあり、このようなシステムを導入する図書館も出始めているようだ。しかし電子著作物の概念が新しいだけに、電子著作権を国際管理する枠組みなどは未だ構築されておらず、残された問題も多々ある。また電子書籍のコンテンツがどのように拡充されていくのかも重要な点である。これらの問題をこなしつつ、電子化の波は図書館へ次第に浸透していくことになるかと予測される。

多くの大学等の図書館に関していえば、本格的な電子書籍の問題はこれからといえるが、学術雑誌のオンライン化、すなわちオンラインジャーナルに関しては、ある程度の対応が進展している。オンラインジャーナルのサイトには様々あり、またその形態にもPDFやHTMLを使用するものなどが存在しているが、特にオンラインジャーナルでは迅速さに加え、ハイパーリンクによる文献検索機能の付加などもあり、これからも一層、普及していく要素を持っている。本学の図書館でも、それなりの対応がとられてはいるが、今後はさらに、導入するための理念が求められる状況にある。これと併せ、図書館の「機関リポジトリ」としての役割にも真剣に取り組んでいく必要がある。

本学の図書館では、新年度（4月）から図書館システムが更改されることになった。この新しいシステムにより、図書館の利便性は今までより向上するとともに、Web対応の非来館型機能が強化された。このようなITによる利便性向上は大切とは考えるが、それとは別に大学図書館として持つべき重要な点は、空いた時間や授業終了後などの時間帯における「快適で勉強しやすいスペースの提供」という機能である。利用者から頼りにされ、また役立つ大学図書館という視点から、特に学生にはこの「快適で勉強しやすいスペースの提供」という機能の十分な活用を望みたい。

(図書館長・被服学科教授)

島田法子・中島邦・杉森長子共著

『上代タノー女子高等教育・平和運動のパイオニア』（日本女子大学叢書 8）

島田 法子

本書の目的は、上代タノの生涯を二つの側面からたどることである。すなわち、上代は女子高等教育のパイオニアであり日本女子大学第六代学長として大きな足跡を残したが、同時に日本の女性たちによる平和運動の指導者でもあり、世界を舞台に活動を展開した。この二つの側面から複合的に上代の生涯をたどることを試みている。

上代タノに関する研究は、不思議に思われるほど少ない。上代に関する出版物も多くはなく、日本女子大学英文学科が、上代が書いた文章を収集編集して出版した『上代たの文集』（1984）と、上代が名誉都民に選ばれた際に東京都が出版した『名誉都民小伝』（1982）があるが、ほぼそれで尽きている。もちろんその二冊は研究書ではない。今回、日本近現代史の専門家で、日本女子大学の創立者成瀬仁蔵や大学の歴史に詳しい中島邦氏と、婦人国際平和自由連盟日本支部長をつとめられ、平和運動研究についての第一人者でもある杉森長子氏のご協力を仰いで、何とか一冊の本として『上代タノ研究』の上梓にこぎつけることができた。私自身に関してはアメリカ史が専門であり、門外漢の後ろめたさをおぼえつつ、上代の幼少期からアメリカ、イギリスへの留学期を担当させていただいた。

本書は、第一部「上代タノと女子教育者への道」の第一章から第三章までを島田が担当している。ここは、主として上代が教育者としての基盤を築くまでに焦点を合わせて論考を行っている。第一章では上代の生誕から日本女子大学校を卒業して教壇に立つまでの時期を、第二章では特に新渡戸稲造とのかかわりと第一回目のアメリカ留学を、第三章では第二回目のアメリカ、そしてそれに続いたイギリスへの海外留学の時代を扱っている。

第二部「上代タノと戦後の日本女子大学時代」では、第一章から第三章までを中島邦氏が担当している。特に日本女子大学の新制大学昇格から、戦後の上代の教育者としての活動、そして日本女子大学学長時代の上代に関する論考を行っている。具体的には、第一章では、教育者としての上代のバックボーンとなった恩師成瀬仁蔵とのかかわりを、第二章では戦後の教育改革と日本女子大学との関係を中心に、そして第三章では日本女子大学学長としての上代の活動を扱っている。

第三部「上代タノと平和運動」では、上代と平和運動の論考に焦点を合わせ、第一章から第三章までの三章を杉森長子氏が担当している。上代は教育者としての側面と、平和運動家としての側面の両方から捉えなければ、全体像をつかむことはできない。第一章では戦前の時期を、第二章では戦中期を、そして第三章では戦後の時期を、それぞれ扱っている。

本書は三名の執筆者がそれぞれに分担をきめて進めた研究の成果を、第一部から第三部までにおさめたもので、研究の手法や文体等、それぞれの持つ特徴をそのままに生かしたかたちで出版している。また、およその分担をきめているが、それぞれの分担部分にかかわりを持つ事項もかなりあって、記述内容に多少の重複があってもそのままにしている。

最後になったが、本書の出版は日本女子大学総合研究所出版助成金によって可能となった。ここに深く感謝申し上げたい。

(英文学科教授)

2010年3月31日刊行 ドメス出版 326頁 *目白・西生田所蔵 請求記号 289.1-Jod



上代タノ平和文庫 上代タノ平和文庫は、本学の第六代学長上代タノ先生の寄贈図書により創設された文庫です。「女性が、国際平和についての問題意識を明確に持ち、平和への推進力となることを念願し」て選ばれた図書が、現在もそのご遺志を継いで図書館友の会により継続収集されています。図書館（目白）5階にあり、ほとんどの図書は貸し出しもできます。

新見肇子著

『シャーロット・スミスの詩の世界—ミューズへの不満』(日本女子大学叢書9)

新見 肇子

本書は、イギリスの女性詩人シャーロット・スミス(1749-1806)の主要な詩作品の翻訳とスミスの詩に関する論考、解説および小伝からなる。スミスは、存命中、三つの詩集、11篇の長編小説、その他、児童書、劇、翻訳などを出版した多作な人気作家であり、その詩は同世代のみならず、次世代のロマン派詩人にも影響を与え、現在では、「最初のイギリス・ロマン派詩人」との評価もある。しかし、同時代の他の多くの女性作家と同じく、19世紀半ばから忘れ去られた。つい先頃までイギリス文学史において、ロマン派詩人といえば、ブレイク、ワーズワス、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツの6人の男性詩人(いわゆるビッグ・シックス)が挙げられていた。これには様々な理由が考えられるが、1970年代以降、フェミニズム批評とジェンダー論によって、18世紀から19世紀にかけて旺盛な創作活動を展開した女性詩人たちの復権が始まった。ロジャー・ロンズデイル編の『オックスフォード版18世紀女性詩人アンソロジー』(1989)をはじめとする詞華集の形でテキストの刊行が始まり、スミスの他、アン・イアズリー、ジョアンナ・ベイリー、フェリシア・ヒマンズ、メアリ・ロビンソン、ヘレナ・マライア・ウィリアムズ、エリザベス・ランドンら90人近い女性詩人が蘇った。さらに各個人の詩集の出版が続いている。それにともなって研究も次第に盛んになり、学会における発表も増え、イギリス・ロマン主義の再布置が図られつつある。

スミスは、それでも分厚い文学史の中ではわずかに言及されて、命脈を保ってきた数少ない女性詩人だったが、20世紀後半まで、作品のテキストは出版されず、一般読者に知られることも重要な作家として理解される機会もなかった。現在、2007年に完結した14巻の全集も刊行され、本格的な研究が始まった。本書は、この代表的なイギリス・ロマン派詩人の作品を訳詩の形で紹介し、彼女の人生との関係も考察し、詩人スミス像を明らかにする、日本では初めての試みであると言える。その結果、わが国における、男性作家中心のロマン派文学史・文学論の再点検と、今後のスミス研究の発展の一助となることが期待される。

本書は2部に分かれている。第1部は訳詩集で、第一詩集『哀歌調ソネットおよびその他の詩』(1800年までに第1巻は9版、第2巻は2版を重ねた)からは、39篇のソネットと9篇の詩を訳出した。スミスは、恋愛をテーマとする伝統的なペトラルカソネットから語り手の悲哀、憂鬱、絶望、怒りなどを描く哀歌的なソネットへと主題を変えている。この詩集は、古典主義時代には哀微していたソネットのロマン主義時代における復活に貢献したと評価されている。第二詩集『亡命者』(1793)は全訳である。フランス革命下のフランスからの政治的、宗教的亡命者を扱い、革命の功罪を論じるきわめて時事的な作品である。死後出版である第三詩集『ピーチー・ヘッド、寓話およびその他の詩』(1807)からは「ピーチー・ヘッド」の全訳である。感受性の文学の特徴を持つ前2作と趣を異にし、神や他者との関係が失われた孤独な近代的人間像を描き出している。先述したように、いずれも本邦初訳である。

第2部は3つの章からなり、スミスの詩の解説を兼ねて、その特質を解明している。序章では、18世紀後半から20世紀半ばまでの、ロマン派時代の女性詩人の抹殺と復活の受容史とその中のスミスの位置と詩の特徴を説明している。1章では、作家、また母としてのスミスの波乱に満ちた生涯と詩以外の作品の紹介である。2章は、上記の詩集に関する三つの論考からなり、スミスの詩作における特質および変化を論じている。特に、女性が書くことのジェンダー規範、男性作家を中心とする出版界や市場原理への巧妙な配慮、語り手が女性として体験した数々の不幸と嘆き、フランス革命をめぐる政治的態度、自然と人間についてなど、ロマン派詩人としての特異性と普遍性に注目している。

スミスの全容を知るには、本書に収録できなかった詩はもとより、スミスの膨大な長編小説群や彼女の家庭、係争、出版者や友人との関係を赤裸々に伝える書簡、および18世紀の児童文学に特異な一角を占める子どものための著作など他の多くの作品の翻訳や研究が今後待たれる。

(英文学科教授)

ベルリン図書館事情 ードイツ最大級の学術図書館：ベルリン国立図書館ー 印牧 沙織

ブランデンブルク門からテレビ塔の建つアレクサンダー・ブラッツまで続く長い大通り、ウンター・デン・リンデン。森鴎外の『舞姫』の舞台として日本人には馴染み深い。また2010年夏、世界陸上でマラソン競技のルートとしても記憶に新しいかもしれない。そのウンター・デン・リンデンをブランデンブルク門から半分まで来ると左手に見えるのが「シュタビ (StaBi)」の愛称で知られるベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) である。歴史的な門が守るネオバロック様式の建築だ。利用者の憩いの場である中庭を抜けると正面玄関が見えてくる。ベルリン国立図書館ウンター・デン・リンデン館は1945年までの古書を中心とした貴重な蔵書を持ち、ドイツ国内だけでなく国外からの利用者も多い。そのため館外への貸出はしておらず、館内のみで閲覧が可能だ。

既にお気づきの読者の方がいるかもしれないが、そう、ベルリン国立図書館は、「ウンター・デン・リンデン館」というだけに一つだけではない。もう一つポツダム・シュトラセ館がある。当館はウンター・デン・リンデン館からおよそ2.5キロ離れたところに位置し、ポツダム通りをはさんでベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地フィルハーモニーと向かい合って建っている。まだベルリンが東西に別れていた頃、向かいのフィルハーモニーが建築家ハンス・シャロウンによって完成されると、1975年同じ建築家の設計によって西ドイツの国立図書館として建てられた当図書館は、世界的なモダン建築として、また映画「ベルリン天使の詩」の舞台としても、名高い。閲覧室は812席を設けその数はベルリンを誇り、天井は高く大きな窓からは光が差し込み明るい開放的な雰囲気が印象的だ。館内にはカフェテリアもあり、いつも学者・学生で賑っている。1946年以降刊行されたメディアを中心に扱うポツダム・シュトラセ館は館外への貸出サービスを行っている。

【役割】

ウンター・デン・リンデン館とポツダム・シュトラセ館から成るベルリン国立図書館は、およそ2千3百万のメディアを所蔵するドイツ図書館界の中でも最大級の学術図書館である。今年 (2011年) 創立350周年を迎える。1661年プロイセン公フリードリッヒ・ヴィルヘルム公によって設置され、1914年現在のウンター・デン・リンデン館の場所に移す。以降ドイツ最大の図書館として『事実上の国立図書館』としての役割を果たしていた。第二次世界大戦の敗北でベルリン国立図書館は東西に別れて運営されるようになり、ウンター・デン・リンデン館は東ドイツに位置していたことより東ドイツ国立図書館としての役割を果たす。ドイツ再統一後は国内外の膨大な蔵書を所有する図書館として、国内のメディアのみを扱うドイツ国立図書館に対して補佐的役割を担う。貴重な古書を多く所蔵し、また様々な分野におよぶ国内また国外で発行された現行本、そして東洋学、スラブ学、音楽 (主に楽譜)、インキュナブラ、地図など特化されたメディアを所蔵するベルリン国立図書館は多くの学者の研究活動を支えている。



ポツダム・シュトラセ館

【利用方法】

ベルリン国立図書館での資料の閲覧また資料の請求及び受け取りは利用料金が発生する。年間利用 (ドイツ住民票を所持していることと前提とする) ならば25ユーロ、月間利用は10ユーロとなっている。利用申し込みには身分証明書すなわちパスポートの提示が必要。一方蔵書検索は利用申し込みなしでSTABIKAT (<http://stabikat.staatsbibliothek-berlin.de/>) にて検索可能。アルファベット順に整理された著者目録・書名目録と、キーワード目録及び分類目録での蔵書検索が出来る。

(ベルリン・フンボルト大学 学生、本学英文学科 卒業生)

私と大学図書館

横田 慧美

私と図書館の関係は長い。幼稚園に通っている頃から週に1回は市立図書館に本を借りにっていて、大学に入学するときも、もはや図書館の使い方は完全にマスターしているから大丈夫と勝手に思い込んでいましたが、その思い込みは粉々に砕かれることとなりました。

なぜなら大学図書館には、市立図書館や高校などにあった図書室とは違いレポートや論文を書くために必要な専門書が多く並べられており、またそれまで気分を選んでいればよかった本の選び方を必要な情報を探し出すためのものにかななければなりません。パソコンを使って必要な論文を探し出すといった作業は今まで私はやったことがなく、かなりとまどいました。

やがてどうかそれにも慣れてきた頃、家庭教師のアルバイトをすることになったため、担当生徒の志望大学の過去問題集を探そうとしましたが、OPACで検索してもでてきませんでした。頼みの国会図書館で検索してもだめ。そんな困った時に力になってくださったが参考係の職員さんです。参考係は目白の大学図書館ではゲートを入れて正面にあります。それまで私は、他大学の図書館へ資料を閲覧しに行く際の紹介状を書いていただくときにしか利用したことがなかったのですが、思い切って相談してみました。すると私がいくら探してもみつけれなかった過去問題集のデータベースを探してくださったのです。そのときは本当に感動しました。そのあとも参考係の職員の方々には調べものに詰まったときに何度も助けていただいています。

自分で調べることも大切ですが困ったときは素直に調べもののプロである参考係さんに頼ってもいいのではないのでしょうか。私はそれをしなかったことで入学当初、随分時間を無駄にしたと思います。大学図書館では講習会がひらかれているのでそれに参加するのもおすすめです。これを読んでくださった皆様が大学図書館を有意義に利用できるようお願いしています。(史学科・3年次学生)



大学図書館ノススメ

清水 香織

新入生の皆様、『大学の図書館』と聞いてどの様な印象を持たれましたか？小中高校や街の図書館と違い、難しそうな専門書や学術書が多く、何となく敷居が高いと思われた方も多いのではないのでしょうか。

実は私も、最初はそう思っていました。しかし今では、図書館を授業やレポートの参考文献を探すだけの場にしてしまうのはもったいない、と考えています。

カウンター横の『学生の読みたい本』のコーナーには、小説をはじめ学生に人気の本が並んでいます。入館ゲートの近くにあるソファは座り心地も申し分なく、そこで雑誌や新聞を広げてのんびりするもよし。すぐ側にあるパソコン達は、コンピュータ演習室に空きがない時にも活躍してくれます。さらに、それぞれの階の書架に添って設置されている1人用のライト付学習机は密かな人気スポットです。私は1年生の頃、よくそこでドイツ語の課題をしていました。最近はノート作りやレポート用参考文献のまとめなどでお世話になっています。居心地が良く、うたた寝をしてしまう事もしばしば・・・。

現在、私は西生田の大学図書館で学生アルバイトをしています。主な仕事は書架(本棚)整備と配架(返却本を書架に戻す事)です。仕事で書架を見ている時も、面白そうな本が目に入ってきます。自分の学科に関わる本の場所以外にも足を向けると、意外な発見があり楽しいです。

図書館は、知れば知るほど、学生生活を快適にしてくれる頼もしい存在です。同時に、賑やかなキャンパスの中で、心を落ち着けられる癒しと安らぎの空間でもあります。困った時はカウンターへどうぞ。職員の方々も親切かつ丁寧に教えて下さいます。人によって様々ですが、私の場合はアルバイトというきっかけで図書館をより身近に感じ、自分なりの楽しみ方や親しみを持つ様になりました。ぜひ一度、探検を兼ねて図書館を訪ねてみて下さい。きっと、あなたに合った図書館の楽しみ方が見つかるはずですよ。(現代社会学科・2年次学生)



図書館を使いこなそう!



—新OPACもご紹介—

日本女子大学図書館は目白・西生田両キャンパスにあります。本学の学生・教職員・卒業生・その他利用資格をお持ちの方は、両館を利用することができます。図書館を上手に使いこなすには、普段から慣れ親しんでおくことが大切です。今日は、その第一歩をご一緒に参りましょう。



まずは、「図書館のしおり」を読んでみましょう。

新入生の皆さんは入学時に配布されたものがお手元にあるかと思えます。図書館内にも自由にお取りいただけるよう配置されています。また、図書館ホームページの利用案内(<http://www.lib.jwu.ac.jp/UG.html>)にもPDF版が掲載されております。積極的にご利用ください。

入館・貸出には利用カード(両館共通)が必要です。

学生証を持参の上、カウンターで利用カードの交付を受けてください(学生以外の方はカウンターに申し出てください)。利用カードは登録した本人のみ有効です。入館、貸出、貸出中図書予約、倉庫委託資料の取り寄せ、目白・西生田図書館間の資料取り寄せ・置き置きをするには、利用カードが必要です。貸出手続きの済んでいない図書を館外に持ち出そうとするとアラームが鳴ります。



図書を借りる際のご注意!

1日でも1冊でも返却の遅れている図書があると、新たな貸出ができません。図書を延滞すると、延滞した日数分だけ、貸出停止になります。

また、貸出は必ず本人が手続きをしてください。利用カードの貸し借りはトラブルの原因になります。図書の延滞罰則や紛失時の弁償などは、すべて、利用カードの持ち主の責任です。

日本女子大学図書館ホームページを見てみましょう。

日本女子大学図書館ホームページ (<http://www.lib.jwu.ac.jp/>) は、インターネット環境があれば、どこからでもアクセスできます。



OPAC(本学蔵書検索)、オンライン・データベース、電子ジャーナルなど、便利なコンテンツが満載です。

開館カレンダー、利用案内や各種サービス時間の案内、What's New についても確認できて便利です。

まずは、色々な項目をクリックしてみてください。

それでは、資料を探してみましょう。

日本女子大学図書館は開架式（書架（本棚）をオープンにしているという意味）です。自由に書架に行って資料を探してください。貴重書や和装本、AV 資料（視聴覚資料）など、一部の資料については館員が出納しますので、利用を希望する場合は、カウンターまで申し出てください。

STEP 1：資料の配置

資料は、和書、洋書、雑誌・年鑑類、参考図書、大型本など、その性質や形態によってまとめて置かれています。また、同じ主題（テーマ）が集まるよう、和書は日本十進分類法（NDC）、洋書はデュエイ十進分類法（DDC）により分類され、書架に並んでいます。

STEP 2：蔵書検索（OPAC）

探している資料が本学に所蔵されているかどうか、所蔵されている場合その配置場所はどこか、正確に知るには目録で調べることが必要です。目録には OPAC（OnLine Public Access Catalog）があり、コンピュータでの検索により、本学の蔵書（目白地区蔵書の 1990 年 4 月以降受け入れのもの、および全洋雑誌、西生田地区の全蔵書）を調べることができます。1990 年 3 月以前に受け入れた目白地区の蔵書については順次データ入力中です。

図書館ホームページトップの **OPAC** をクリックすると下図の検索画面に移動します。

新入生以外の方はお気づきでしょうか？2011 年 4 月から図書館システムが新しくなりました！OPAC 検索もより多機能になり、携帯電話からも OPAC 検索、貸出更新、貸出中図書予約ができるようになりました。ますます便利になる本学 OPAC をいつも身近に感じ、積極的に利用してください。

OPAC の使い方については、メニューの操作手引または各ページの利用方法をクリックしていただければ、ご案内が表示されます。さらに OPAC の効果的な使い方を学びたい方には、講習会をご用意いたしますので、ふるってご参加ください。

STEP 3：参考係

参考係は、皆さんが必要とする文献や情報を探し出すサポートをしています。必要な資料が見つからないという時は相談してください。



最後になりましたが、図書館をどう活かすかは皆さん次第です。まずは図書館に足を運び、少しずつ慣れ親しんでください。お待ちしております！（館員・閲覧係 中澤恵子）

2010年度「学生が読みたい本」を実施して

「大学図書館にも、気軽に読める本、話題の本をもっと置いてほしい」と言う学生の皆さんの声に後押しされて、2007年度後期より始めた新たなリクエスト制度「学生が読みたい本」も4年目を迎え、すっかり図書館の年間行事として定着した感があります。今年度については、前期は5月10日(月)～5月19日(水)、後期は11月1日(月)～11月11日(木)に行い、目白・西生田合わせて前期は123件、後期は145件の希望が出されました。

カウンターで「『学生が読みたい本』の募集はまたありますか。いつですか」という質問をなさる方、何タイトルも希望を出して、その理由をていねいに書いてくださる方もいます。このイベントを心待ちにいただいていること、また、利用者と館員を結ぶコミュニケーションの場としても活用していただいていることを感じ、大変嬉しく思っています。

また、今年度は「『学生が読みたい本』を読んだら、この作者に興味を湧いた」という希望理由がいくつもあったことが印象的でした。選ばれた図書がその希望者だけでなく、広く皆さんに読まれ活用されているのだなと実感します。館員としても学生さん達が注目する作家が歴然とわかり、なかなか興味深いです。どの作家が今人気なのかは、ぜひ「学生が読みたい本」の書架で確認してみてください。

過去に選ばれた図書の中には一定の期間の後、館員が再度検討をして一般書架に配架されるものもあります。「今まで『学生が読みたい本』の書架にあったのに、見当たらない」と思われたら、ぜひOPACで検索をしてください。これからもこのリクエスト制度を通して、大学図書館を利用する皆さんへ、幅広い読書の手助けになってゆければと思っています。

なお「学生が読みたい本」は、話題の本、小説類など大学図書館の本来の蔵書構成から外れる学習・研究目的以外の図書が対象となっています。研究や授業で必要な資料に関しては、従来通り参考カウンターで随時ご相談を受け付けていますので、ぜひそちらをご利用ください。



こんな図書が選ばれました (西生田)



「学生が読みたい本」専用書架および2010年度受入図書の一部 (目白)

(図書館だより編集委員会)

編集後記 新たな場所に足を踏み入れる時、ためらいや戸惑いが誰しもあるものではなかろうか。まずはキャンパスの様々な場所に慣れて心地よいお気に入りの場所を見つけていただきたい。大学図書館もそのひとつとなれるようお願いする日々である。卒業生や退職される専任教職員の方も図書館の利用が可能、是非ご再訪を。巻頭写真は、泉会「2009年度貴重資料購入援助費」により購入した1896年刊の図書、『図書館だより』No.138 (2010.6.23) に川端教授による解説を掲載している。(中曽根)